

談話室 第十回
 十九世紀の人々
 閑居小人

精神科医になって、学会というものにも出てみたら、パワーポイントスライドという電気紙芝居でどの先生の講演でもむやみに出てくるのが、クレペリンという人の顔写真なのである。

西洋哲学の世界では、ギリシャの賢哲プラトン以後に新しい哲学なく、すべてはその注釈に過ぎないなどとずいぶん後進の気を削ぐような大家の格言がある。

精神医学の世界でも、術学趣味からか知らないが、クレペリン以後に新しい発見なく、すべてはその注釈に過ぎないと現に言う人もある位で（アキスカル）、クレペリンという人は、体系的な精神医学教科書を書くことに一生を費やした人である。

中井久夫は変った人だと評しているが、十九世紀後半から二十世紀の初頭はウイルヒョウやコッホ、エールリッヒ、野口英世、オスラーなど、クレペリンを含め、猛烈な人に満ち満ちている。

クレペリンはお酒をある時からやめにしたらしい。そうしたら、それだけで禁酒家の変わり者として有名になってしまった。私は無類の酒

好きなので、気が合いそうもない。血液病学の祖エールリッヒは、ビアハウスで皆と語らい、葉巻をくゆらすのを愉しみとした人で、私ごみの人である。アルケミスト（錬金術師）の血をひいて、万巻の書物から着想をえ、古風な砒素を用いて駆梅療法、サルバルサンをあみだした所も面白い。その研究を手伝った佐八郎は北里柴三郎の研究所で野口英世と同僚だった人である。

現代人は昔ならひまがあつたらうと往々思いがちであるが、仔細にみると、それは思い込み過ぎないように思われる。十九世紀の人もむやみに多忙である。

野口英世はむろん朝から晩まで働いている。ウイルヒョウなどはいつ寝ていつ仕事をしているのだろうと思わせるほどに論文も書けば国会議員のしごともこなしているのに、なぜか会う人に忙しさを感じさせることは微塵もなかったという。オスラーの教養趣味も多忙を背景にしていることを忘れてはならない。

そんなに時間に追われて仕事をしていた、解放されたいと思わない筈はない。クレペリンは旅を愛したという。西欧の世界を離れて、見知らぬ南洋やアジアの地を旅する。

この冒険きぶんはコッホも共有するところで、若き日のコッホはお金が無いから世界旅行を諦めて医

者になり、顕微鏡を駆使してミクロの世界の冒険に出たまでで、結核菌を発見してウイルヒョウに代り一躍ドイツ医学界の首領となると、エジプトやインド、アフリカ、そして日本へ、念願だった旅に出かけている。

いづれにせよ、大物は小さくまとまつてはいないようである。

●エミール・クレペリン（一八五六一一九二六）：現代の精神医学の基礎を築いた人。著名な弟子の一人にアロイス・アルツハイマー（一八六四—一九一五）がある。歌人で精神科医の齋藤茂吉（一八八二—一九五三）が欧州に留学時クレペリンに握手を拒まれた話は夙に有名。茂吉は一生「あの毛唐め」と怨みに思っていたが、クレペリンは愛国者で、当時敵国だった日本を憎んでいたという。

●パウル・エールリッヒ（一八五四—一九一五）：このカール・ヴァイゲルト（一八四五—一九〇五）と共に、現在も使われる組織染色技法の殆どを編み出した人。血液病学のほか、免疫学の基礎も築いた人で、病巣のみを破壊する「魔法の弾丸」のアイデアは、抗生物質や抗がん剤治療に今も生きている。一九〇八年、第八回ノーベル医学賞を受賞している。ロベルト・コッホ（一八四三—一九一〇）：一八八二年に結核菌を発見した功績で名高い。一介の田舎医者がカール・ツァイスの顕微鏡のみを武器に、細菌学という当時最新の研究分野をほぼ独力で開拓したのだから、その偉大さは計り知れない。当時ドイツの敵国であったフランス細菌学の泰斗、天オレイ・パスツール（一八二一—一九一〇）とは、学問上も「普仏戦争」を継続する大猿の仲であった。コッホのもとに留学して破傷風菌を発見した人が慶応大学医学部の祖、北里柴三郎（一八五二—一九三二）で、北里は終生コッホを祠まで作って崇拜した。コッホを尊敬した人は数多く、エールリッヒもその一人。一九〇五年、第五回ノーベル医学賞を受賞している。

●ルドルフ・ウイルヒョウ（一八二一—一九〇二）：顕微鏡を駆使した病理学研究で、ドイツ

医学を世界に冠たるものに押し上げた。肺塞栓症の発生メカニズムを解明したことや、「白血病」の名付け親として著名。政治的には若き青年の日から革命の闘士でもあり、自由主義派のドイツ帝国議会議員として、鉄血宰相ビスマルクの専制主義に頑強に抵抗した。長命で八十歳の誕生日は日本医師会をふくめ、世界中から祝福された。

●サー・ウィリアム・オスラー（一八四九—一九一九）：カナダ出身の内科学。欧州に留学後、アメリカ、イギリスで活躍し、教育者として多くの俊英を育成した。専門の研究分野は血液病学。視診の達人で皮膚科にも通じていた。英米医学圏では今日でも「聖人」なみの崇拜を受けている。簡潔な文体で書かれたその内科学教科書は二十世紀前半、世界的なベストセラーであり、若き日の小説家サマセット・モーム（一八七四—一九六五）もオスラーの教科書を医学を勉強した。人文学や医学史の教養深く、弟子の一人に、著名な脳外科医ハーヴエイ・クッシング（一八五四—一九三四）がいる。今に百歳の現役医師ならんとしているのが日野原重明（一九二一）先生もオスラー研究者として有名。オスラーは晩婚で得た一人息子を第一次世界大戦で失い、悲嘆にうちひしがれて亡くなった。

●野口英世（一八七六一一九二八）：福島県出身。刻苦勉励して開業医試験に合格したが、一介の医者で終るのを潔しとせず、当時最新の研究分野であった細菌学研究に突き進んだ。借金と踏み倒しの名人で、貧窮にめげなかった。一度会ったさりのサイモン・フレクスナー（一八六三—一九四六）を頼りに単身アメリカに渡り、彼の助手としてロックefeller研究所に職をえた。「人間発電機」の異名をとるほど疲れを知らぬ働きぶり、彼はアメリカに暖かく迎え入れられた。当時世界的に最も有名な日本人の一人。しかし、野口の時代、コッホに代表される細菌学の英雄時代は終焉に近づき、多数の研究者チームによるウイルス学の新時代を迎えようとしていたため、後世、野口の「新発見」は悉くまちがいがらけと判明、彼の医学的業績で今日まで残るものは、進行麻痺患者の死後脳に梅毒病原体を発見して、第四期梅毒が確かに脳神経梅毒であることと顕微鏡で実証した報告論文（一九二二年）のみである。最新の研究論文はすぐにふるびてしまいが、オスラーのごとき随筆文学は不朽の輝きを放つ。

●